

キルトと私の出会い

黒羽 志寿子

プロフィール
1938年山口県生まれ。1975年アメリカ在住中にキルトに出会う。帰国後全国でキルトサークルを主宰。藍染や更紗などの日本の布を使った作品が国内外で高く評価される。「黒羽志寿子のキルト藍と更紗」(日本ウォーグ社)をはじめ、最新刊として「Pieces of my life」(OJUN Books、英仏語版)がある他、30冊を超える著書がある。

特派員の妻として、二人の子供たちとアメリカに渡ったのが一九七五年、私が満三八歳の時です。渡米四日目にキルトに出会ったのですが、それが人生を変えるなんて思いもよらないことでした。

英語も車の運転も出来ない私を、近所の別の社の奥さんがショッピングモールに連れて行つて下さり、その一角にある出来たばかりのキルトショップへついでのように立ち寄ったのです。初めて見たキルトは、一五〇年も前に作られ、掛け布団(ベッドカバー)として使われたものというものでした。

何?何?と、所々シミのある色褪せたそのキルトに近寄ると、店主が広げて私の手に持たせてくれました。小さな直角三角形で、たくさんの色柄が使われ、中には一枚の三角形に継ぎめがある物もあります。私が不思議に思ったのはそれだけではなく、布団の一面にやさしい影を作っている針目にも心を奪われたのです。キルトの端を持った私の体はジーンとして、胸はドキドキしていました。

その針目は飾りではなく、布団を丸洗いしても中綿が寄ったり、千切れたりしない為のものだと聞かされ、「何という知恵!」と感動は一気に高まり、「私もキルトを作りたい」と、その場で針・糸・布と当座必要な材料を買って帰り、翌日から基本

のパターンの四角つなぎを縫い始めました。家庭科の宿題は一度も出来上がった事がない私ですが、そのクッションカバーのトップ(表地)は一日で縫いしました。

早く綿をはさんであの影絵の様なキルティングというものがしたくて、二歳の娘の布団は人形のパターンと、鳥の羽根をイメージしたキルティングのデザインとの組み合わせで作りました。

ある時、幼稚園にかよっていた息子がクラスの女の子のバースデーパーティーに呼ばれました。さて、プレゼントはと考え、娘のキルトのパターンをポシェットにして作り持たせたところ、大評判となり、クラス中の女の子に作るはめになりました。おかげで早くアメリカの生活にも馴染め、キルトの腕も上がりました。

その後、ギルドの集会(キルターの集まる組合)で、アーミッシュ・キルトに出会い、再び大きな衝撃を受けました。無地の布が織りなす大胆でシンパルな作品に心揺さぶられたのは、団十郎茶と黒を組み合わせた歌舞伎の定式幕の様な日本の粹に繋がっていると感じたからです。その時のドキドキを胸に抱えて帰国した一作目は、アーミッシュの影響を強く受けたものになりました。

12 みんぱく Information

14 想像界の生物相
創造界の化物僧
香川 雅信

16 新世紀ミュージアム
国立台湾大学人類学博物館
野林 厚志

18 シネ倶楽部 M
「お前はモロヘイヤ好きで、俺はナダが好き。それだけだ」
——「ヤギのアー」とイブラヒム
相島 葉月

20 ながなんぢや
あなたの名前はどこですか?
福井 栄二郎

21 次号予告・編集後記

1 エッセイ 千字文

キルトと私の出会い
黒羽 志寿子

特集 アーミッシュの生活と文化

2 そこに暮らし、そして世界に生きる人びと
——アーミッシュ・キルトから考える
鈴木 七美

4 アーミッシュの信仰と生活
——ヨーロッパ文化の古層
踊 共二

5 アーミッシュのライフスタイル
大藪 千穂

7 進化する伝統・多様化する社会
野村 奈央

8 再洗礼派のなかのアーミッシュ
中 朋美

10 ○○してみました世界のフィールド
民衆宗教の世界観を歩く
石原 和

月刊
みんぱく

6月号目次